

エゼキエル書18章21-24節 「滅びることを望まない神」

1A 悪者の悔い改め 21-23

1B 悔い改めの必要性 21

2B 全ての罪の赦し 22

3B 主の御心 23

2A 正しい者の墮落 24

本文

エゼキエル書 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、16 章まで来ました。午後に 17 章から 19 章までを一節ずつ読みます。今朝は、18 章 21-24 節までを見ます。

21 しかし、悪者でも、自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行なうなら、彼は必ず生きて、死ぬことはない。22 彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはなく、彼が行なった正しいことのために、彼は生きる。23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。…神である主の御告げ。…彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。24 しかし、正しい人が、正しい行ないから遠ざかり、不正をし、悪者がするようなあらゆる忌みきらうべきことをするなら、彼は生きられるだろうか。彼が行なったどの正しいことも覚えられず、彼の不信の逆らいと、犯した罪のために、死ななければならない。

これまで私たちは、主がエルサレムを滅ぼすという預言の言葉を聞いてきました。彼らが罪を犯してそれを思い直さないため、それで彼らがどんなに大丈夫だと思っても、主は必ず彼らを裁くと宣言されていました。このように、とても重いメッセージ、重い言葉を神は語っておられました。しかし、私たちはしばしば、そうした言葉の背後にある心を探らずに、ただ怖がってしまいます。けれども神の心は、ここにあるように「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。…神である主の御告げ。…彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」であります。主は彼らを滅ぼしたいから滅ぼす、と言われたのではなく、彼らが滅びてほしくない、悪から立ち返って生きてほしいと願って、そう警告しておられたのです。

私たちは先週、再び 2011 年の地震と津波を思い出すような地震の揺れと小規模な津波を経験しました。そして話題になったのが、NHK の地震速報とその後の津波警報です。テロップに、「すぐ逃げて」と赤く出てきて、そしてアナウンサーがいつもの声を大きくして、「今すぐ逃げてください。」と繰り返して語っていました。そのことについて、多くの人が驚きました。しかし、これは 2011 年の津波の時の警報の時の教訓であるとのこと。冷静沈着に語ることによって、その緊急性が伝わらなかったために、被害者が増えてしまったのではないかという強い反省からです。主は、似たような思いをユダヤ人たちに抱いておられました。誰もが悔い改めて滅びることなく、救われること

を願って、声を大きく上げておられるのです。

1A 悪者の悔い改め 21-23

ところで以前、ここに、進藤龍也さんという牧師がいらっしゃいました。彼の奥さんに以前お会いしたことがあるのですが、ご夫婦でロゴス・ミニストリーのサイトを利用しているとお話を伺っていました。ですからお会いするのを楽しみにしていました。そして今も、しばしばフェイスブックで会話しています。進藤さんが、自分がイエス様を信じた話をしてくださいました。

彼は覚醒剤の薬物依存症でした。17歳の時に高校退学後、暴力団組員に勧められて初めて使いました。自らも暴力団員になり、組長代行にまでなったそうです。毎日のように薬物を使い、初めて逮捕されて執行猶予を受けた後も、すぐに手を出したそうです。それで再度逮捕。懲りずに出所後に、覚醒剤を売りさばく売人になりました。しかし、ついに薬物が体を蝕み、恐ろしかったのは仲間からの信用を失ったのです。暴力団から逃げ出したのですが、30歳の時に三度目の懲役刑が決まりました。

二度目の服役中に、元ヤクザの牧師による著書を進藤さんは読んでいました。そして、三度目の服役中に、減刑嘆願書を書いてもらおうと彼に頼んだそうです。そこで、「お礼に聖書でも読んで、感想文を送ろう」と差し入れてもらった聖書を読みました。それがすごい、創世記から一ページも漏らすことなく、舐めるようにして読んでいったそうです。一千頁以上読んだところで、次の言葉が胸に響きました。それがエゼキエル書 33 章 11 節です。「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。」そうです、ここで読んだ言葉と同じ内容です。悪者が態度を悔い改めて、生きることを神が喜ばれるということです。それで彼は福音を伝える思いが与えられ、神学校に行き、地道に教会の牧会活動をしておられます。それから、刑務所にいる人々、出所したばかりの人々を助け、自立できるような働きにも取り組んでおられます。彼の著書の題名は、「人はかならず、やり直せる」であります。主は、私たちにやり直しの人生を与えようと待っておられます。

1B 悔い改めの必要性 21

21 節をまた読みます、「しかし、悪者でも、自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行なうなら、彼は必ず生きて、死ぬことはない。」人が生きるための道は、「自分が罪を犯したのだ」という切実な悔恨から始まります。今、話した牧師、進藤さんは自分が覚醒剤をやっていることの罪を自覚したのが、それを使用してからずっと後であるように、私たちは一人一人、自分が罪を犯したのだと自覚するのに時間がかかります。

主は、18 章 4 節で「罪を犯した者は、その者が死ぬ。」と言われていました。なぜ主がそんなことを言われたかと言いますと、ユダヤ人たちがエゼキエルの語る神からの言葉を聞いて、「なぜ、私たちが咎められないといけないのか。先祖たちが犯した罪のために、私たちがとぼっちを受け

ているのだ。」と言っていたからです。実は、自分たちが罪を心の中で、また言葉や行ないで犯して、それをそのまま心で放置していたのですが、それに気づいていませんでした。それで、自分ではなく先祖が犯した罪のせいで滅ぼすと言っていると思っていたのです。これが人間の罪の始まりですが、神がアダムに「なぜ、あなたは食べてはいけないと言った木から、実を取って食べたのか？」と問い質したら、アダムは、「あなたの造った女が、私にくれたからです。」と言いました。自分が罪を犯したのではない、という責任転嫁をいつの間にかやっています。

先祖が犯した罪なのだ、という言い訳は、「環境が自分をそうさせたのだ」と言い換えることもできます。自分が生まれ育った環境がそうだったから、私がこうなっているのだ、というものがあります。初めからそうだったのだから、仕方がないのだというものです。もちろん、そうした環境的な要因というのはものすごく大きいものです。しかし、ここから良き知らせ、福音があるのです。ここに書かれているように、「自分の犯したすべての罪から立ち返り、わたしのすべてのおきてを守り、公義と正義を行なう」ということができるのです。イエス・キリストに出会うのであれば、その強烈な出会いさえあれば、環境や他の人によって受けたものを捨てるほどの思い直し、悔い改めをすることができます。

イエス様が、エルサレムに向かっている時、エリコという町にザアカイという取税人がいました。彼はイエス様を見ようと思ったけれども、背が低く、人々が周りに群がっていたので、彼はいちじく桑の木に登りました。それでイエス様は彼を見て、「ルカ 19:5 ザアカイ。急いで降りてきなさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」と言われました。そしてザアカイは立って、大喜びでイエス様を迎えました。そして、彼は言ったのです。「19:8 主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」イエス様という方を喜んでいる中で、彼の中に罪からの救いが起こっていました。彼は自分が税を徴収している中でだまし取っていたものを返すように決めました。また、自分は誰にも分け与えないで私腹を肥やしていたのですが、貧しい人々に施します。彼の心に、イエス様によって神の救いが来たからです。

イエス様を知り、悔い改める者は、必ず行ないが変わります。主は 18 章 31 節で、「あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。」とされています。新しい心と新しい霊を神が下さるのです。自分で何か行ないを変えようと思っている時は、まだ真剣ではありません。悔い改めるとは、単に行ないを変えることではありません。神の前にへりくだることです。自分が神とキリストの前に向かいます。そして、自分は罪人であることを認めることです。ザアカイのように、自分の心に、自分の私的な部分に主をお迎えすることです。

2B 全ての罪の赦し 22

そして 22 節には、「彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはなく、彼が行なった正し

いことのために、彼は生きる。」とあります。ここで大事なのは、「**すべてのそむきの罪**」であります。自分のあり方が間違っていたことに気づいて、それで主に立ち返った人は、全ての背きの罪が赦されます。この罪は赦されるけれども、あの罪は赦されない、ということではありません。あるいは、百の罪を犯したけれども、一つの罪を悔い改めたら、それは赦されるけれども、残りの 99 は赦されない、ということではありません。借金を百万円していたとして、一万円だけを帳消しにするというものではありません。全て、なのです。「1ヨハネ 1:9 もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」

これは都合が良すぎる、と思うかもしれません。しばしば、罪が赦されるという話をしますと、「それでは人が成長できない」という話を聞きます。罪を自分で少しずつ償うからこそ、赦されるものなのでは？と思うかもしれません。しかし、罪の赦しというのは量ではないのです。質です。もし、誰かが自分を赦してくれる時に、「この部分は赦すけれども、あれについては赦さない。」つとってあり得ません。赦す時はすべて赦すのです。人生は、自分は何点取れるのかな？という、自己修養や自己実現ではないのです。私たちは、人生までを学校のようにしてしまっています、何点が取れるか？というもの。いいえ、人生は「関係」なのです。人との関係もありますが、神との関係なのです。

神に全ての罪が赦されるということ、このあまりにも大きな寛容を受け入れてください。そして、このあまりにも大きな寛容の背後にあるのは、神があまりにも聖いということがあります。私たちの前におられる方は、90 点で受け入れてくださる方ではありません。神ご自身は完全に聖い方ですから、100 点を全ての科目で取らないと受け入れられない方です。したがって、神が罪を赦される時は半端ではありません。一点の陰りがあっても、受け入れられない聖なる方なのですから、一点の陰りがないように全て赦してくださるのです。

イエス様の弟子ペテロは、イエス様が人を赦すことについて教えていた時に、「誰かが私に対して罪を犯したら、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」と尋ねました、なんとイエス様は、「**マタイ 18:22 七度まで、とはわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。**」と言われました。そして喩えを話されます。王の僕が王に対して借りがあるのですが、それが一万タラントであると、あります。タラントは六千デナリに相当する価格であり、一デナリが当時の一日分の労賃に相当します。つまり、6 千万日分の労賃だということです。一日、一万円もうけたとします。そうしたら 6 千億円の借金です。その喩えでは、必死に返済するといつて、ひれ伏している僕に対して、「18:27 かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。」とあるのです。六千億円の借金を帳消しにする？途方もない金額です。ですから、全ての罪が赦されたのです。成長できるか、どうかという話ではありません。聖なる神の前で、自分の罪深さに圧倒され、そして神の全ての罪を赦す寛容さに圧倒されて、それで神を畏れかしこみ、神と共に歩むのです。

3B 主の御心 23

そして 23 節をもう一度読みます。「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・神である主の御告げ。・彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」このことを必ず覚えていてください。私たちの神に対するイメージは、必ず歪められています。悪魔は実在します。悪魔の行なうことは、神が意地悪な方であること、不公正で理不尽に人々をあしらうのだと思わせることです。蛇がエバを惑わした時に、「創世 3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と言いました。神が意地悪をしているのだと吹き込んでいます。ですから、神が裁くと言われている時にたちを滅ぼすことを喜ばれていないということを知る必要があります。むしろ、こう書いてあります。「2ペテロ 3:9 主は、・かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

神が滅ぼす時は、それを強いられている時であります。罪を犯したら、その者は死ぬという法則を神でさえ変えることはできません。なぜなら、神はご自分の性質に反することをおできにならないからです。神は聖く、正しい方です。正しい方が、罪あるものを罪無しとすることはできないのです。しかし、主は憐れみ深い方です。ゆえに、罪人や悪者に対して忍耐深くあられ、その人が悔い改めて生きるように願っておられます。

地獄というのは、どういうところなのでしょう？その言葉が言い表しているように、「地の中にある獄屋」であります。刑務所であります。言い換えるなら、「永遠の無期懲役の獄屋」であります。永遠に閉じ込められている所ですが、マタイ 25 章 41 節によると、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火」とあります。悪魔と彼に追従する手下の墮落した天使たちのために、そこに永遠に閉じ込めるために、主はそこを用意されました。ですから、人がそこに投げ込まれることを意図しておられません。ところが、人は先ほど話しましたように、悪魔の偽りに従います。神が慈しみ深く、良い方であることを歪める悪魔の仕業にそのまま従ってしまいます。ですから、人が地獄に投げ込まれる時は、それは自ら神の福音を拒んで、悪魔の言っていることに従っていくことによって投げ込まれます。自らの意志によってのみしか、地獄に行くことはできません。ところが、あまりにも多くの人が福音を拒んでいます。

2A 正しい者の墮落 24

そして最後、24 節です。「しかし、正しい人が、正しい行ないから遠ざかり、不正をし、悪者がするようなあらゆる忌みきらうべきことをするなら、彼は生きられるだろうか。彼が行なったどの正しいことも覚えられず、彼の不信の逆らいと、犯した罪のために、死ななければならない。」人が間違えている考えの一つに、「善行は積み上げることができる」ということです。何か、どこかに海外でバケーションに行きたいから、一年間一生懸命働きました、という考えがあったとします。同じように、自分はたくさん正しいことをして、それで後で悪いことをしてしまったとしても、前にあった善行の貯金があるから、大丈夫だよ、と思うわけです。けれども、実際の司法ではどうでしょう

か？自分がものすごく正しい生き方をしてきたとします。けれども高齢になってから、これまで我慢してきた怒りが爆発して、それで人を殺してしまいました。これまでの良い行ないで、その殺人罪が帳消しにされるでしょうか？いいえ、殺人は殺人で罰せられます。それと同じで、これまでどんなに正しいことをしていても、今が悪いことをしているのであれば、主から引き離されるのです。

すると、不公平ではないか？と思われるかもしれません。実はその声を既に主は予期しておられて、25 節でこう言われています。「あなたがたは、『主の態度は公正でない。』と言っている。さあ、聞け。イスラエルの家よ。わたしの態度は公正でないのか。公正でないのはあなたがたの態度ではないのか。」本当にこの人はとんでもなく悪い人だ、情状酌量の余地などない、と思われる人がいるとします。けれども、その人が教会に来るとします。神とは何か、キリストは誰なのかを求めて、やってきたとします。そのような人は、神に大いに歓迎されています。では、これまで人に良いことをやってきているので、特に自分は神の話を聞きたくないし、キリストも要らないという人がいたとしたらどうでしょうか？人々からはいつもその人徳について、褒められているのです。神は、お断りします。なぜなら、神とキリストを知りたくないと思っているのなら、なぜそもそも教会に来たのか？ということなのです。神の住まわれる天国にも、もちろん入ることはできません。

要は主が何を求めておられるのでしょうか？ここにありますが、「態度」です。主は、私たちがどれだけ何をして、しなかったのかという業績を見せてもらうことには、興味はありません。そうではなく、ご自身の愛を知ってほしいと願われているだけなのです。神は愛しておられるのです、これを知り、神のふところに我が身を任せることを願っておられます。ですから、へりくだって、主の憐れみの中で生きているのだという理解を持っている人を求めておられるのです。どんなに正しいことを行なっているように見えても、神の心から離れていたら意味がないのです。放蕩息子の話の兄息子のようにになってしまうのです。

ミカ書を最後にお読みします。「6:6-8 私は何をもって主の前に進み行き、いと高き神の前にひれ伏そうか。全焼のいけにえ、一歳の子牛をもって御前に進み行くべきだろうか。主は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の犯したそむきの罪のために、私の長子をささげるべきだろうか。私のたましいの罪のために、私に生まれた子をささげるべきだろうか。主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。」ここでのいけにえを、自分の正しい行ないだとしてください。そうすれば、何が良いことかが分かります。へりくだって、神と共に歩み始めてみましょう。